



基礎と臨床をつなぐ素晴らしい着眼点の本

評者 | 志水太郎 獨協医大主任教授・総合診療医学

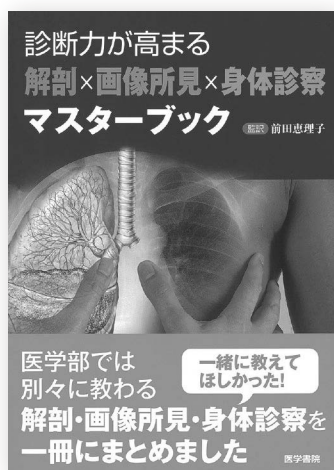
“ありそうでなかった”画期的な視点の、「基礎」と「臨床」をつないでくれる有意義な書籍と思います。編者4名のうちクリニカルフェローが2名（カナダおよび米国）というチーム編成が、北米大陸の教育層の厚さを物語り、また『New England Journal of Medicine (NEJM)』の「Clinical Problem-Solving」でおなじみの Joseph Loscalzo 先生（Harvard/Brigham チーム）も参画して書かれた臨床解剖の本です。原書のサブタイトルは「An Integrated Approach to Psysical Examination and Medical Imaging」ですが、邦題もその本質を見事に翻訳された「解剖×画像所見×身体診察」となっています。

本書は、核となる Chapter 1「臨床での統合的アプローチ」、そしてそれに続く Chapter 2 は部位別の各論からなります。各論は、基礎医学というよりはむしろより臨床的な事項がメインになっており、そこに画像所見と解剖図譜がバランスよく配置されていて、臨床画像には慣れない低学年の学生でも、画像の読み方について解剖を基礎としてスムーズに学ぶことができる構成になっています。各章は、症例を基にしながら、「初期評価」「器官系の概要」「症例集」という三部構成になっていて、スムーズに基礎→臨床の学習に入っていくことができます。

しかし、何といてもこの本で秀逸なのは、Chapter 1 でしょう。「統合的な医学アプローチへの導入」という見出しから始まり、ある症例を提示され、医師がどのように考え、何を観察し、どのようなことに気を配るのか、ということが丁寧に書かれています。おそらく低学年の学生を対象としたようなスタートですが、2 ページ目からは身体診察、数ページにわたるバイタルサインについての記述へとつながり、所見と解剖学的な表現の記述、さらに症例が進み画像検査の説明とその所見、そして検査の結果の病態生理と結果の科学的解釈（感度・特異度）まで触れています。1 つのケースからこのように有機的に学ぶ、という学び方のお手本のような構成になっています。本書評の冒頭で、画期的と述べたのは、特にこの Chapter 1 のような「ありそうでなかなかない」内容の展開からです。

評者は臨床系の大学教員である一方、基礎医学（解剖学）の教壇に立つこともあり、臨床の観点から基礎に触れるということを教員の側から実感する立場の医師です。たとえば先日の授業や実習ではまさに、学生の古くからのニーズである基礎と臨床が直結したような勉強がしたいという声を肌で感じました。かくいう私も、十数年前、英国の医学部に留学させていただいた折、臨床医学の実習やミニレクチャーが常に基礎医学の知識に立ち返って教えられる教育現場を間近に見て、同様の思いを強くした経験があり、本書を手にしてその悩みに一条の光が差したような気がして、とてもうれしくなりました。

日本語訳も自然で、とても読みやすいです。特に低学年の学生、そして医学教育をどのように教えようかと悩む教員の先生方にも、大推薦の 1 冊です。 



診断力が高まる 解剖 × 画像所見 × 身体診察 マスターブック

Sagar Dugani
Jeffrey E. Alfonsi
Anne M. R. Agur
Arthur F. Dalley = 編
前田恵理子 = 監訳

定価：本体 5,800 円 + 税
B5・408 頁／医学書院／2018
[ISBN978-4-260-03627-6]